電車ごっこ

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
電車ごっこ

【Ｎコード】
Ｎ００１００

【作者名】
源雪風

【あらすじ】
あるところに孤独な少年がいた。
少年はいつも電車ごっこをしていた。

校庭の真ん中で僕は一人、電車ごっこをしていた。
いつも一人だ。
僕の電車に乗っていいのは文句を言わず、喫煙せず、無駄口をたたかないヤツだけだ。
そうすると、条件に合う客なんていないから、誰も乗れない。
僕はさみしい気持ちを紛らわすために、全力で走った。

走るのにへとへとになって、木の下で休んだ。
クラスメイトが楽しそうに遊んでいるのが見える。
どうして僕はいつも一人なんだろう。
そうか、電車に乗っていいお客の条件をゆるくしよう。
もう誰でもいいから乗ってよ。
もう僕はへとへとだよ。
僕はゆっくり歩き出した。
このスピードならお客も呼びとめやすいはず。
でも、あれ？おかしいな。
こんなにいっぱい歩いているのに誰も声をかけてくれない。
どうしよう。

あきらめかけたその時、校庭の隅っこにポツンと立っているミキちゃんを見つけた。
僕はその前を通る。
しかし、ミキちゃんはこっちを見るだけで乗りたいとは言ってこない。
そんなに見ているなら早く「乗りたい」って言ってくれよ。
僕はミキちゃんの前を何往復もした。
でもミキちゃんは、もじもじしてるだけだ。

もしかしてミキちゃんも僕に声をかけられるのを待っているのかな。
「ねぇ、乗らない？」
僕が声をかけると、ミキちゃんはこくりとうなずいた。
僕の電車はスピードが遅くなったし、重くなった。
だけど、走るだけで楽しくなった。
僕は笑った。
ミキちゃんも笑っているだろうか。
振り向いてミキちゃんの顔を見たいと思ったけど、怖くなってやめた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0010o/

電車ごっこ

2010年10月9日10時37分発行